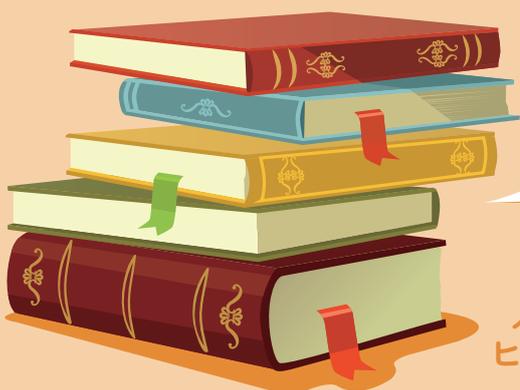


BOOK REVIEW

人生のヒント
VOL.3

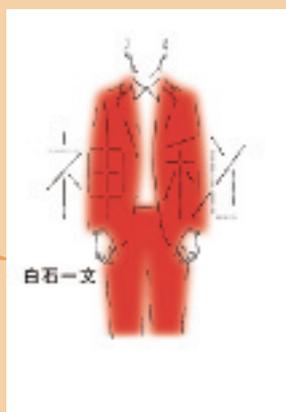


このコーナーでは、
毎回異なるブックナビゲーターに、
人生やライフプランを考える上での
ヒントとなる本をご紹介します。

REVIEW. 1

神秘

白石 一文 著



[毎日新聞出版刊、2014年4月、
本体1,900円+税]

病から開かれる人生がある。病とはそれまで数十年の結果であり、未来への新たな入口でもある。この小説は、出版社の役員である53歳の菊池が、末期の膵臓がんを診断され、余命1年を宣告され、神戸へと赴く物語である。21年前に出会った、奇跡的に病を癒す力をもつ女性を思い出し、彼女に会いにいこうとする。この小説を読みながら遠藤周作のエッセイ集『万華鏡』に出てくる“創造的病い”という言葉を読み出した。がんにかかった女性のユング学者が、フロイト的に因果的に病を捉えるのではなく、ユング的に自分は何に向かって病をえたのかと考えるべきというのだ。本書で菊池は様々な文献を通して病気の意味を考え、最終的に「がんはね、生まれ変わってというサインなのよ」という言葉に出会う。内省豊かな感動的な物語だ。

ブックナビゲーター

文芸評論家 池上 冬樹

[いけがみ・ふゆき] 1955年山形市生まれ。立教大学文学部卒。朝日新聞、週刊文春、小説すばる、共同通信ほかで活躍中。著書に『ヒーローたちの荒野』、編著に『ミステリ・ベスト201日本篇』ほか多数。「山形小説家(ライター)講座」と「せんだい文学塾」の世話役を長年務めている。山形市在住。



REVIEW. 2

空にみずうみ

佐伯 一麦 著



[中央公論新社刊、2015年9月、
本体2,200円+税]

仙台の高台の集合住宅に住む作家と染色家の夫婦の1年間の物語である。夫婦は鳥や虫や樹木に親しみ、古い暦で月をかぞえ、旬の肴に舌鼓をうち、らっきょうをつけ、無花果の甘煮を作る。ここには大きなストーリーはなく、豊かな五感で捉えられた春夏秋冬があるだけだ。それが生きる手触りとなる。そして忘れてならないのは、日常のそばに「あの日」があることだ。東日本大震災、地震、仮設住宅などの言葉は一切出てこないけれど、作者は突然の震災で奪われた人々の生活を見つめている。特に最終章では、大いなる災厄にあい、死を見つめた人たちの悲しみがこぼれおち、生きることの危うさが際立ってくる。死者を思いやりながらも、良き生活が生まれ、静かに続くことを願わざるをえない辛さ。災厄と希望という主題が切実に響きあう傑作である。

REVIEW. 3

Yの木

辻原 登 著



[文藝春秋 刊、2015年8月、本体1,300円+税]

人は人、自分は自分とわかっていながらも、他者との人生を比較してしまうものだ。この作品集の表題作は、実在の作家に憧れて小説を書きはじめ、新人賞を受賞してデビューしたものの活躍できず、徐々に精神的に追い詰められ、やがて憧れた作家が選択した自死を自らも望むようになる。現代日本文学の傑作とっていい『冬の旅』(集英社文庫)もそうだが、辻原登は魂の深奥へとひたすら突き進む。凄まじい殺人がそのまま自由の獲得となり、凄惨な生の解放を訴えるというアナーキーさを捉えたけれど、この小説でも、自殺の誘惑にかられる男の絶望をとことん味わわせてくれる。しかし絶望の淵にたってはじめて輝く<生>があるのも事実。辻原登を読むことは時に危険であるけれど(長篇では豊穡な物語があるが)、同時に大きな喜びでもある。